説教20221120エレミヤ23：1-6ルカ23：35-43「楽園、パラダイス」

「楽園、パラダイス」という説教題は勿論、聖書から取られたものですが、この題をつけるにあたって、この世のポップな歌謡曲からの連想があったことを白状しなくてはなりません。

そこで少し、「楽園、パラダイス」という歌謡曲の中身を、聖書と対比してみておきたいと思いますが、少なくとも二つの曲が確認できました。一つは陽気な曲で一つは悲し気な曲でした。その歌詞は次の様であります。

でたらめな空、小鳥が泳ぐ　朝日がほら　波打ち際　君は目覚めた

つまさきから音が溢れて　踊る心刻め　ビート　ここは楽園

二曲目

たった一回きりの命に　怖気付いた夜もあった

なにしてんだろ？心はまだLow　頑張ろう頑張ろう　奮い立たせ

こういった心境は、私たちがこの世にある限り、心惹かれ心躍らされることであり、それを頭ごなしに否定することも出来ないでしょう。人生では、折に触れて、この様な歌に励まされて、悲しみを忘れて、又先に向かって元気に歩み出すということもあるでしょう。

しかし、この様なポップな歌謡曲が、あなたの心の大半を占めてしまって、この曲なしには、一歩も前に進めないというような、いわば、ハマった状況にあるならば、それは危険な事でありましょう。なぜならば、夢中になった心は何時か醒めるものであり、冷めた時にはあなたは、非常な空しさを味わうことになるであろうからです。

では、聖書はどうでしょうか。聖書と歌謡曲の根本的な違いは、敢えてこの世的な表現をすれば、聖書の言葉にハマったら、もう醒めることはない。。片や、歌謡曲にハマったら、もう醒めた時の準備をしないといけない、ということでしょう。

醒めない喜びや幸せがある楽園、パラダイスが完成されるのは、天の国のことでありますが、その天の国に入れられる人たちは幸いであります。では、この地上において、醒めない喜びや幸せがある楽園、パラダイスが全く見出せないかと言いますと、そんなことはなくて、今日の聖書箇所では、イエス様と一緒に十字架に付けられた一人の犯罪人の口を通してその楽園のことが証しされています。犯罪人は言います。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」イエスは応えます。「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」。

クリスチャンはこのイエス様との問答を聞いただけで、たとえ十字架に掛けられたような苦しみと悲しみの時でさへ、この上ない喜びに満たされる者でありますが、まだ信仰を得ていないノンクリスチャンの方々には、理解できないかも知れませんので、もう少しこの世的な事例を挙げてみたいと思います。

その昔、スプーン一杯の幸せという小説や、コーヒー一杯の幸せという歌謡曲がありました。今、年配の方ならば、この題名が物語るような、何かささやかな物事が、この上ない喜びで満たされていくといった体験を数多くなさったことでしょう。例えば、第二次世界大戦後のまだ砂糖と言った甘いものが世の中に不足していたころに、一杯のおしるこをおごってもらったという体験が、一生忘れられないよき思い出として心に残っているということもあります。

このように、喜びや幸せは、たとえ分量は少なくても、限りがある処へ喜びや幸せが注ぎ込まれた時、その場所が溢れんばかりにそれに満たされ、その喜びや幸いが末永く持続するということです。

聖書に記されている喜びや幸せは、断然、この満たしという言葉で言い合わされることであります。

イエス様は「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」と言われ、私たちの内側を永遠の命に至る御言葉で満たしなさいと言われました。

又、パウロやペトロは聖霊に満たされて、次の場所へと導かれ次の業を行ったのです。このように聖書において、満たしということは大変大事です。私たちはこの世にあって、命に限りがある土の器であります。しかし、その器の中に、主の御言葉や聖霊や、主の憐れみや慈しみが注がれて、その器がいっぱいにされるときに、私たちは溢れんばかりの喜びや幸せに満たされることになります。

人が御言葉に満たされるには時間がかかります。その具体的な長さは、人によりまちまちでありましょう。人によっては、パウロの様にたちまち御言葉によって打ちのめされて、聖霊に満たされたというケースもあることでしょう。まあ、これは、その時間が長かったからどうで、短かったらどうという問題ではなくて、主から定められたその時間をそれぞれに味わい楽しむということでありましょう。とにかく私たちはその与えられた時間に御言葉に聞き続けるということが大事であります。

さて人が生涯にわたって御言葉に聞き続けたか否かは、今日のルカ福音書の箇所に、おそろしいほどに如実に語られています。

ここに登場する、二人の犯罪人とは、この世で多かれ少なかれ罪を負っている人間の全員の姿を言い表しています。この二人が十字架に掛けられるに至った経緯はそれぞれでありましょうが、二人は今、同じようにイエスに隣り合わせて十字架に掛けられています。彼らは裸にされ釘打たれて、それでも尚、語ることを許されています。語ることが許されているということ、このことも主イエスの大いなる恵みであります。どんな苦難の時でも私たちには主イエスに向かって語り掛ける自由がそれぞれに与えられているのです。

では、犯罪人たちはイエスにどんな言葉を語ったのでしょうか。一人目は「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」と言ってイエスをののしりました。さて、イエスは、この犯罪人にどうお答えになったかと言いますと、「しかし、イエスは何もお答えにならなかった（マタイ15：23）」のだと思われます。そこには、主なる神から見放された静寂のようなものが感じられるでしょう。これでは、十字架の苦しみは解消するどころかいや増してくるのではないでしょうか。この犯罪人は御言葉で満たされるどころか、自らその注ぎ口を閉じているようなものであり、それは彼の発した言葉の一つひとつによることなのです。

それに比べて、二人目の犯罪人はどうでしょうか。彼はこういいました。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」この人は、主イエスの憐れみと慈しみの言葉を知っていました。彼は、十字架に付く前から、少しづつ自らの内に、御言葉を蓄えてきたのでしょう。彼は、犯罪人とされながらも、その地上での人生の歩みの間、御言葉にいつも心を留めて、それを味わって、その言葉で自らの内を充たし続けてきたのでしょう。御言葉はこの様に、長い時間をかけて自らの内にある器の内に静かに注ぎ込まれ、そうして、私たちはこの地上での最後には、その味わいに満たされ、天の国を待ち望むようにされて、将来に向かってイエス様の慈しみを待ち望む者とされるのでしょう。

幸いなことにこの人は、苦しみの十字架の上でさへ、イエス様の救いの御言葉を聞くことが出来ました。「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」とイエスはこの人にお応えになりました。

一体、人とやり取りをしていて、返答がないということは、なかなかに悲しいことであります。ましてや、私達人間にとって創造主である主イエスからのお答えがないということほど絶望的な状況はないのです。それこそがまことに絶望的な十字架上の状況でありますが、一人目の犯罪人はそのことに気が付いていないのです。一方で、二人目の犯罪人は、自分が語った、美しい言葉に対して、主イエスが応えて下さいました。このイエスの御言葉を聞いて、御言葉の通り、彼にとって、今日ここでの十字架上での出来事は、楽園、パラダイスでの出来事とつながっていく先駆けの出来事となったのでした。

以上が、聖書が説くところの個人的な救いの有様でありましたが、一方で私たちは、共同体として、天の国へと移されていくという、集団としての私たち、という見方も忘れてはならないでしょう。この世の中で、人々が集っている共同体というのには、数多くの種類があります。家族や会社、趣味の同好会、国や地域、そして教会もそれぞれ共同体であります。

古代の牧者キュプリアヌスはその手紙の中で「教会のほかに救いはない」と記しましたが、その意味は、この世の死から救われるような共同体というのは教会以外には見出せないということでしょう。

このことは、今日の犯罪人の個人的な救いを上回るような、主イエスの救いの喜びの大きさを私たちに示しているのではないでしょうか。私たちは、主イエスが私たちに注ぎ込まれる喜びに満たされていくわけですが、その主イエスの喜びがあまりにも大きくて、幅広くて、そして深いあまりに、かえって、その喜びに対して、自ら蓋をして心を閉ざしてしまうということがないでしょうか。わかり易く言えば、「神様、なぜ他の人には幸せをお与えに成るのに、私には与えてくれないのですか」といった、嫉妬の類の心境に陥ってしまうということです。

今日のエレミヤ書の前半は、この様な、喜びにフタをしたような教会共同体の有様が、主によって戒められています。殊に、ここでは、御心に適わない牧者の姿が糾弾されています。牧者というのも人の子ですから、この様なよろしからぬ有様に陥ってしまう可能性がいつもあることでしょう。主イエスの羊の群れをちらし、追い払うというようなことをしてしまうのは、やはりその牧者が嫉妬の類の心の虜になっているからでありましょう。

但し、ここで、人がその牧者を糾弾したところで、全く教会は共同体として栄えていかないばかりか、状況は悪化していくというのが、歴史が証しするところであります。

それでは私たちの救いは何処に在るのかと言いますと、それは、その牧者が立ち直るということとは別問題であり、私たちの救いというのは、やはり心乱されずに、主の御言葉を聞く事にあります。

主は言われます。エレミヤ書23：3より

「このわたしが、群れの残った羊を、追いやったあらゆる国々から集め、もとの牧場に帰らせる。群れは子を産み、数を増やす。彼らを牧する牧者をわたしは立てる。群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない」と主は言われる。

この私というのは、主イエスのことであります。主イエスが集め、数を増やし、そして牧者を立てるのであります。この御言葉を信じる喜びというのは、二番目の犯罪人が主イエスから答えを聞いた喜びに通じることであり、又それを上回る教会共同体全員の喜びとなることでしょう。

祈ります

天の父

あなたは、この地に御子イエスを遣わし、希望がないところに、希望をもたらして下さいました。ありがとうございます。あなたは散らされた者たちを教会へと集め、その数を増し加え、必要な牧者をお与えになります。私たちは、あなたのこの救いの御計画の内に安息し、あなたのために働き、あなたを賛美します。

私たちが、この世の誘惑やそそのかしに、惑わされることがないように、あなたの憐れみと慈しみによって私たちを満たして下さい。

たとへ、死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れません。常に御言葉に守られ、美しい言葉で、あなたを伝えていくことが出来ますように。

父と聖霊と共に一体